末近浩太 2013『イスラーム主義と中東政治――レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』名古屋大学出版会.
――― 2018『イスラーム主義――もう一つの近代を構想する』(岩波新書　新赤版 1698) 岩波書店.
鈴木董 1993『イスラムの家からバベルの塔へ――オスマン帝国における諸民族の統合と共存』リブロポート.

(松尾　昌樹　宇都宮大学国際学部国際学科准教授)

千葉悠志、安田慎(編)『現代中東における宗教・メディア・ネットワーク――イスラームのゆくえ』春風社 2021 年　246 頁

本書は、中東地域におけるイスラームの現代的動態について、メディアおよび制度的ネットワークの視点から解明することを目的としている。中東地域をフィールドとする複数の研究者たちの寄稿による論集であり、各々の専門から多角的な分析・考察が行われている。なお、本書が分析対象とするメディアとは、イスラームに関する書物、雑誌、映画、放送、インターネットなど様々な情報媒体を指す。また、制度的ネットワークとは、イスラームの教えに基づいて組織化・制度化された集団・団体・国家間組織などを意味する。

近年、中東地域におけるイスラームの現代的動態といえば、主に政治的イデオロギーとしてのイスラーム主義に注目が集まっていた。その背景には、「アラブの春」後のムスリム同胞団などイスラーム主義運動の政治的台頭と挫折、さらには 2010 年代に猛威を振るった「イスラーム国(IS)」らジハード主義者の過激な活動があった。他方、イスラームに関するメディアやネットワークに関する分析や議論は必ずしも十分には行われてこなかった。世界規模での情報化の進展に伴い、中東地域も例外なくメディア社会の様相を示している現在、メディアやネットワークが社会をとらえる鍵と筆者たちは考えている(237 頁)。

このような本書の主張は極めて妥当なものと考えられる。イスラームの現代的動態を包括的に知るためには、政治的なイスラーム主義のみに着目するだけでは不十分であることは明らかである。かつて大塚和夫は、ムスリムたちの近代化には歴史的・社会的環境に応じて様々な可能性や多様性があると指摘し、そのあり方を地道な実証的研究によって明らかにすることが重要と述べた[大塚 2004: 187–190]。また小杉泰は、20 世紀末から 21 世紀初頭にイスラーム復興の結果としてムスリム社会における「イスラームの日常化」が起きたと指摘しており[小杉 2021: 24–25]、メディアやネットワークにおける「イスラームの日常化」を論じることはイスラーム復興の現在を知るために重要である。それゆえ、メディアやネットワークという新たな課題に取り組む本書の挑戦は、イスラームの現代的動態を考える上で不可欠の試みと言えよう。

では、ごく簡単にではあるが、本書の内容について各章の要点のみを整理したい。本書は、序章を含む計 10 章から構成されており、第 1 ～ 6 章からなる第 1 部「宗教とメディア」と第 7 ～ 9 章からなる第 2 部「宗教と制度的ネットワーク」に大きく分けられる。また、内田直義、相島葉月、近藤洋平の 3 名による計 4 本のコラムが本書の議論を補う形で掲載されている。コラムについては紙幅の都合上論じられないが、いずれもイスラームの現代的諸相に切り込む興味深い内容である。

序章(千葉悠志)では、「中東地域におけるイスラームの現代的動態を、主にメディアや制度的ネットワークと関係づけて理解する」(5 頁)という本書の目的が述べられた後、中東地域における 1970 年代以降のイスラーム復興に関する概観が行われている。特に、「アラブの春」でのイスラーム主義運動の挫折をイスラーム復興の凋落と結び付ける考え方に対して、イスラームの「レジリエンス(強靭性、復元力)」を取り上げて反論している点が興味深い。著者は、イスラームが外部の変化を柔軟に取り入れながら発達してきた事例として、イスラミック・ツーリズムやハラール・ツーリズムのような新しいビジネス分野の誕生、SNS における子供向け宗教教育アプリの登場、イスラーム金融のグローバル経済への適応などを挙げている。こうしたイスラームのレリジエンスに示されるように、情報化に象徴される現代社会の諸変化へのイスラームの対抗／適応の検討、さらには今後のイスラームのゆくえの展望も本書の目的とされている。

第 1 章の「アラビア語による出版技術の発展とクルアーンの刊本化」(竹田敏之)では、近代から現代にかけてのアラブ世界を対象に、印刷技術の導入・発展の過程、および「ムスハフ(書物の形になったクルアーン)」の刊行に至るまでの経緯が論じられている。本章前半では、エジプトの近代化政策の一環で設立され

たブーラーク印刷所の技術発展への貢献や、エジプトに集ったイスラーム知識人らの活躍から当時のアラブ世界における活発な知的交流の一端を知ることができる。本章後半で論じられるムスハフ刊行に至るまでの経緯では、アラブ世界における印刷物の文字や書体の様式美、さらにはクルアーンの「綴り」の正しさをめぐる論争が明らかにされている。また、原画の再現性の高いオフセット印刷の近年の普及によってクルアーン書写の需要が高まり、書家の活躍の舞台が広がったとの指摘は興味深く、そこにはイスラームのレジリエンスを見出すことができる。

第2章の「現代イスラーム改革の思想戦略と『現代のムスリム』誌――20世紀後半のアラブ思想界の深層を読む」（黒田彩加）は、ジャマールッディーン・アティーヤを中心に1974～2017年に刊行された雑誌『現代のムスリム』の内容を分析するとともに、同誌に集った知識人たちの思索や営為を明らかにしている。同誌は創刊当初から、特定の思想や運動を支持するものではなく、全ての人々に開かれた対話のためのプラットフォームとなることを目指した。実際に、誌上では様々な立場から議論が繰り広げられ、同誌を中心に「一つの思想的な学派」が形成されたとする現地の声は興味深い。また、ターリク・ビシュリーのように同誌上で活躍しつつ、実際の社会運動へ政治改革への関与を深める者もいたことは、『現代のムスリム』という雑誌が新たな思潮や政治潮流の源になったことを示している。

第3章の「白い異邦人から真正なる巡礼者へ――ヨハン・ルートヴィヒ・ブルクハルトのマッカ巡礼経験をめぐる再帰性と超越性」（安田慎）では、スイス出身の旅行家ブルクハルトが19世紀に行ったマッカ巡礼旅行記について著した『アラビア半島の旅』が西洋社会とムスリム社会においてどのように受容されてきたのかを分析している。西洋社会では後続の旅行者が旅行記を繰り返し参照し、自らの旅行体験の真正性を担保しようとした。他方、ムスリム社会では、彼の巡礼体験を模倣することで、真正なムスリムの姿を担保しようとした。彼の旅行記は、旅行情報のみではなく、後続の人々の旅行経験を規定し、そして公共性を涵養するメディアとして機能したのである。この受容過程こそが社会におけるイスラーム復興の常態化／日常化の一端であるとの筆者の指摘は、正鵠を射ていると言える。

第4章の「『モラル装置』化する映画――エジプト・コメディ映画に描かれる『偽物のイスラーム』」（勝畑冬実）は、エジプトのコメディー映画におけるイスラーム復興にまつわる人々の表象を分析している。筆者が事例として取り上げるのは、2011年の「1月25日革命」以前の『コンスルの息子』（2010年）と「革命」以後の『火の国のアルムーティー』（2017年）である。いずれの映画においても、イスラーム復興に影響を受けた登場人物の信仰が、本来あるべきムスリムの姿に付加された偽物として描かれていると筆者は指摘する。映画ではこの違和感を伴う付加物は最後に剥がれ落ちてしまう。この「偽物」という表象は、イスラーム主義者たちの「ビドア（逸脱）」を排すべきとの主張と表裏をなしているように評者には感じられた。また、政府の言論統制下で映画が「真正」なイスラームを示すモラル装置として機能しているとの指摘には、まさにその通りと首肯するしかない。

第5章の「放送メディアとイスラーム――宗教的言説空間の拡大と変容」（千葉悠志）は、20世紀半ば以降の中東諸国における放送メディアの発達と宗教との関係を考察している。本章前半では20世紀半ばまでの放送と宗教の関係が概観され、後半では1990年代以降の衛星放送の急速な普及に伴う宗教的言説空間の変容が詳述されている。特に、筆者の指摘する宗教的言説空間の多様化／細分化の議論は興味深い。評者の研究対象であるエジプトの同胞団の一部団員は亡命先のトルコで「ワタン放送」などの衛星放送局を運営し、エジプト政府を非難する番組を放送してきた。こうした反体制派の「宗教番組」が存在できる宗教的言説空間の多様化や細分化は、イスラームの現代的な展開のあり方を論じる上で極めて重要である。

第6章の「神の言葉を伝えるメディア――クルアーングッズからSNSまで」（二ツ山達朗）は、クルアーンを伝達するメディアの変化、その変化へのイスラーム知識人と民衆ムスリムの対応を論じる。本章では、クルアーンの章句が書かれた室内装飾具、SNSでのクルアーン章句の共有などについて、筆者の現地調査に基づく分析が行われている。新しいメディアが登場するたびに、知識人や民衆は神の言葉やイスラームの教えを正確に伝達しているか否かを熟慮した上でメディアを扱ってきた。神の啓示を伝達する様々なメディアの扱いをめぐる試行錯誤の中で、ムスリムの伝統が形成され、敬虔なムスリムという主体が確立すると筆者は主張する。例えば、クルアーンが付されたカレンダーへの対応を民衆が自ら考え実践しているという指摘からは、メディア社会における信仰実践のあり方を考えることができる。

第7章の「難民を救うイスラーム的NGO――イスラームに根ざす支え合いの仕組み」(佐藤麻理絵)では、ヨルダンにおける難民支援について、「イスラーム的NGO」の1つである「タカーフル慈善協会」のシリア難民に対する支援を主な事例に、筆者の現地調査に基づく考察がなされている。イスラームに内在する相互扶助の機能は、同協会の多種多様な支援活動において制度化・組織化されている。このイスラーム的な支援ネットワークが苦境に直面する難民の支えの1つとなっているのである。また、クルアーンやハディースを引用して実施される各種支援キャンペーンは、イスラーム的な慈善行為を可視化する「社会装置」の典型例となっている。ヨルダン国内にはイスラーム的NGO以外の慈善組織が存在するが、難民支援という現代的課題にイスラーム的な価値観がどのように挑むのかを考える上で、本章の議論は極めて示唆的である。

第8章「イスラーム協力機構――宗教で結びつく国際関係」(池端蕗子)は、「イスラーム協力機構(OIC)」の歴史や組織構造を概観した上で、近年深刻化する「宗派対立」についてOICが2004年に発表した「アンマン・メッセージ」を事例に、イスラーム世界における国際コンセンサス形成の営為・過程を明らかにしている。同メッセージは「誰がムスリムか」という宗教的な規範について、政治的・宗教的指導者たちの共同作業で成立したもので、過激主義やタクフィールの恣意的濫用に反対し、対話・寛容などの穏健的立場を是とするものである。これを遵守する国際的な機運がOICを通じて高められた。こうした国際的コンセンサスの形成はイスラームの歴史で画期的な出来事であり、国民国家体制という国際社会の現実に応じたイスラームのレリジエンスの一端をも示している。

第9章「イスラーム金融を作る――法学者たちの静かなる革命」(長岡慎介)では、1970年代以降のイスラーム金融発展の概観を踏まえ、イスラーム法学者、金融実務家、イスラーム経済学者の共同作業による知的営為がイスラーム金融の発展に寄与してきたことが詳述されている。三者の努力によって、イスラーム金融商品の市場競争力が整備され、ポスト資本主義的性格が組み込まれてきたのである。彼らは過去のイスラーム的所産を活用しつつ、時代の要請に合った新解釈を出すことで最新の金融技術をイスラーム金融に導入してきた。近代資本主義と対峙する中で、日々現場から寄せられる実務的課題に対応しつつ、イスラーム金融のあるべき姿を模索し続けるイスラーム法学者たちは、確かに筆者が述べるように「静かなパラダイム転換を画策する日常の革命家」と評することができるだろう。

本書を一読すれば、メディアおよび制度的ネットワークの視点から中東地域におけるイスラームの現代的動態を解明するという冒頭の目的を十分に達成していることが分かるだろう。また、政治分野に関心が集まっていたこれまでのイスラームの現代的動態について、メディアとネットワークという新たな視点から一次資料や現地調査に基づく堅実な実証的研究を行っている点も高い評価に値する。「アラブの春」後のイスラーム主義の挫折という現実に対して、より俯瞰的・包括的な視座からイスラームの現代的諸相を示すことに成功している。

そして、本書が持つ最大の意義は、人間文化研究機構(NIHU)の現代中東地域研究次世代共同研究「中東・イスラーム世界におけるメディアと政治社会の動態に関する研究」(研究代表者:千葉悠志)に集った若手・中堅による研究成果という点である。昨今の中東諸国では「若者のイスラーム離れ」が指摘されることが多いが(12頁)、これは日本の学術研究分野においても言えることかもしれない。しかし、本書に集った執筆者らの顔ぶれからは、日本の学術研究においてもイスラーム研究の「レリジエンス」を見出すことができる。無論、執筆陣には実績を十分に積んだ研究者も一部含まれており、本書の議論に安定感を与えていることを付言しておきたい。

本書の研究成果のさらなる発展を考えるならば、少なくとも次の2点を指摘することができるだろう。第1に、本書でも指摘されているように(238頁)、トルコやイランのような非アラビア語圏の中東諸国へ研究射程を広げることである。第2に、本書における議論と政治的なイスラーム主義との連関を具体的に論じることである。そうすることで、さらに包括的に、そしてより深くイスラームの現代的動態を考察することが可能となるだろう。筆者らのさらなる研究発展に期待するとともに、読者に対しては本書の一読をお勧めしたい。

＜参考文献＞

大塚和夫 2004『イスラーム主義とは何か』岩波書店.

小杉泰 2021「イスラーム主義の変遷と今後の展望」『中東研究』542, pp.18–29.

（横田　貴之　明治大学大学院情報コミュニケーション研究科准教授）

八木久美子『神の嘉する結婚――イスラムの規範と現代社会』東京外国語大学出版会　2020 年　233 頁

本書は、東京外国語大学で 20 年近くアラビア語やイスラーム[1] に関する教育に従事してきた八木久美子による 5 冊目の単著である。前作『慈悲深き神の食卓』[八木 2015] と同様、東京外国語大学出版会の Pieria Books の一つとして出版された。前作がイスラームにおける「食」を扱ったのに対し、本書はイスラームにおける「結婚」を扱う。議論の舞台となるのは、エジプトである。著者にとっては、「大学の最初の一年を終えたばかりの春休み」[八木 2015: 7] に訪れて以来、研究対象の地であり、教育のために学生を送り出す先でもあった。

本書および前作には、「あとがき」がないため、この連作を構想した動機や出版の経緯は文中で語られない。しかし、過去の著作や論考、インタビュー動画を確認する中で、著者の狙いが徐々に見えてきた。それは、ムスリム（イスラーム教徒）として生きる人々がこの宗教をどのように捉え、実践しているのかを描き出すことを通じて、「厳しい」「怖い」とイメージされやすいこの宗教の実情を日本の一般読者に伝えることにある。結婚という親しみやすい題材を手がかりに、コンパクトな一般書に仕立て上げた本書は、新たな「イスラームの啓蒙書」ではないか。

以下、まず本書の内容を紹介した後に、評者がこのように考えた理由を挙げ、それから評者が気になった点について述べたい。

＊　＊　＊

本書の構成は、以下の通りである。（以下、丸括弧内の数字は本書のページ数を指す。）

はじめに（7–13）
第 1 章　結婚できない若者たち（15–29）
第 2 章　結婚、イスラムの捉え方（31–69）
第 3 章　国家の関与と結婚の変容（71–103）
第 4 章　婚姻儀礼と社会的承認（105–129）
第 5 章　「イスラム的婚宴」をめぐる議論（131–172）
第 6 章　「慣習婚」の再検討の可能性（173–194）
むすびにかえて（195–203）
註（205–220）
参考文献（222–233）

「はじめに」では、エジプトの女性薬剤師ガーダ・アブドゥルアールが 2006 年に書いたブログ「結婚したい」が人気となり、2008 年に書籍化され、2010 年のラマダーン月のテレビドラマとして大ヒットしたことの紹介から始まる。著者がこの本を取り上げたのは、20 代後半のガーダが結婚願望と焦りを抱きつつも、「婚活」がうまくいかない自分の状況と社会の状況を冷静かつユーモアたっぷりに述べているからであろう。「ガーダの話を聞いていると、いろいろな疑問がわいてくる」(9) と著者は述べる。たとえば、イスラームは一夫多妻で知られるが、1 人の男性が複数の女性を娶るとすれば、「あぶれる」べきは男性であり、なぜ女性が結婚難に陥るのか。著者は読者の興味をかきたてる問いを投げかける。イスラームにおける結婚規定はどういうものか。ムスリム女性は夫に従属させられているのか。彼女らは「宗教に縛られ身動きができなくなっている」(13) のか。

1）著者は「イスラム」「コーラン」「ファトゥワー」と表記するが、本稿では（引用部を除き）「イスラーム」「クルアーン」「ファトワー」を用いる。理由は後述。